

東海スローイベントと地震活動時間変化

Temporal Changes in Seismic Activity during the Tokai Slow Slip Event

西村 宗 [1]; 松村 正三 [1]

Sou Nishimura[1]; Shozo Matsumura[1]

[1] 防災科研

[1] NIED

東海地域では近年注目すべき変化が起きている。その一つは1990年代後半からみられる地震活動度の変化である。もう一つは2000年夏もしくは2001年頃から始まったゆっくりとした地殻変動(スローイベント)である。スローイベントはプレート境界が地震波を出さないくらいにゆっくりとすべり、蓄積されていた歪を解放する現象、すなわちスロースリップイベントによるゆっくりとした地殻変動と考えられている。東海スローイベントの場合、少なくともM7の地震に相当するモーメントが解放された。これに伴い周囲の応力場が変化し、地震活動度も変化していることが予想される。近年の地震活動度変化は、1990年代後半から始まったという意味でやや時期がずれるが、スローイベントによる応力変化に対応するものなのではないだろうか。本研究ではこの観点から、スローイベント発生域である浜名湖下を含む東海地域について、(1)地震活動度の変化、(2)メカニズム(応力軸方向)の変化、(3)b値等の変化について検討する。また、西村・松村(2005)の固着による応力場数値計算結果に基づいて、地震活動変化からみた応力場変化とその裏にあると思われる固着状態変化について考察する。